

六波羅蜜

こんにちは、斎藤友蔵と申します。

本日は「六波羅蜜」について、お話をさせていただきます。

仏教の修行として、三学に利他行を加えた「六波羅蜜」によって示されています。三学とは「戒、定、慧」で、戒律と精神の統一と智慧のことです。利他行とは他人のために尽くすことですが、その具体的なものとして六波羅蜜があります。

「波羅蜜」の言葉ですが、これはサンスクリット語の”パーラミター”を音訳したもので「彼岸に渡る」といった意味です。

私たちは、煩悩の世界である「此岸（しがん）」に住み、苦しんでいます。対岸の悟りの世界を「彼岸」と呼んでいて、その彼岸に渡るために私たちがやるべき実践が「六波羅蜜」です。その「六波羅蜜」をざっと解説してみます。

「六波羅蜜」には、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧があります。

布施は、金品などを施したり、真理を教えること。怖れを除き、安心感を与えること。

持戒は、戒律を守り、自己を常に反省すること。

忍辱は、苦境を耐え忍び、悪心をおこさず、心を平安に保つこと。

精進は、他の項目をたゆまず努力し、実践し続けること。

禪定は、心を統一し、乱さず安定させること。

般若は、これらを行い、真実の智慧である般若を得ることです。

「般若」とは、サンスクリット語の”プラジュナー”の音訳で、一般的な知識もふくんだ「知恵」より上位の、「智慧」です。「え」の漢字は「恵む」ではなく「慧（けい）」と読む、画数が多い漢字で、諸々の智慧のなかでも最上のものと位置づけられる思想です。

「般若」といえば、あの鬼のようなお面を思い出す人もいるでしょうが、あの面と智慧はなんの関係もありません。能面師の名前が般若坊だったからと言われていました。

般若心経は、真実の智慧に至るための教えの経ですが、この般若の使われ方が正しいですね。

全ての解説には時間が足りませんので、「布施波羅蜜」について、深掘りしてみましよう。

布施とは施しを与えることです。しかしこれはお恵みではありません。

お恵みは、もらった方が御礼をいいます。しかし布施波羅蜜は、施したほうが御礼を言わねばなりません。なぜなら施した人は、菩薩の実践として布施をしているのであって、施しを受けてもらうことによって、それが菩薩の実践になるからです。

菩薩とは、いくつかの意味もありますがシンプルに言うと、悟りと真理を目指す修行者のことです。

「もらって頂いてありがとう」と、口に出して言わなくてもいいですが、そういう気持ちで施したとき、それが布施行になります。

あなたは、托鉢をする僧に出会ったことはありますか？

頭に網代笠（あじろがさ）、足に脚絆（きゃはん）、手に鈴（れい）と、頭鉢（ずはつ）というお椀のような鉢を持った僧が、家々をまわりながら、金銭や食料などをいただく行為です。

托鉢は、いただいたものを生活の糧にするという以上に、とても大きな目的があります。それは善行、良い行いのことです。そして修行の意味合いです。

僧侶にとって修行であるという認識は間違いではありませんが、その真意としては、逆に「施しをする側、つまりお布施を出す側」にも修行という意味合いが生じる行為なのです。

要するに、僧侶に施しをすることで功德を積む、布施波羅蜜の実践ができるということです。私が住む愛媛の田舎では、今でもたまに見かけることがありますが、多くの人が戸惑い、その意味を理解できていないのではないかと思います。

時間がなくなりましたので今回はここまでにして、明日また続きのお話をいたします。